

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	辻 絵理子
論文題目	ビザンティン余白詩篇研究 —『テオドロス詩篇』とストゥディオス修道院工房
<p>審査要旨</p> <p>本請求論文は、中期ビザンティン時代（8世紀半ば～13世紀半ば）に作例が残る、余白詩篇写本と呼ばれるジャンルを扱う。余白詩篇とは、あらかじめ設けた余白に挿絵を描く形式である。旧約聖書の詩篇が本文であるこれらの写本は、しかし新約聖書の物語や聖人伝など、他のテキストに基づく挿絵を持つという特徴を有する。</p> <p>主に対象とするのは『テオドロス詩篇』で、ビザンティンには珍しくコロフォン（奥付）を持つ作例である。そこには写字生であり画家であったテオドロスが、ストゥディオスの修道院長のために、1066年に制作したことが記されている。基準作例である『テオドロス詩篇』を中心に、他の余白詩篇写本、及びストゥディオス修道院工房で制作された他ジャンルの写本と比較検討することによって、手本に忠実とされるビザンティンの画家が行っていた創意工夫、修道院工房特有の図像などを指摘する。学術雑誌に掲載された論文7本の内容に、後の研究成果を併せてまとめたものである。</p> <p>内容は2部構成をとる。第1部は、余白詩篇写本における、本文の絵画化の諸問題を扱う。『テオドロス詩篇』には、手本に描かれていた挿絵を、元の文脈とは異なる理由で移し、改変し、重層的な意味を加えた箇所がある。挿絵によって異なるその根拠を検討し、明らかにするためには、これまでの分析方法では不足であるとして、請求者はレイアウトや銘に着目し、幾つかの例を取り上げて新たな手法を提示した。</p> <p>まず、余白詩篇写本の特徴を概観し、『テオドロス詩篇』の構成・特徴を確認した。その上で『テオドロス詩篇』の、挿絵を施された全ての章句の試訳と、挿絵の記述を行った。セプトゥアギンタ（旧約聖書のギリシア語訳）の詩篇本文は邦訳がないため、巻末附録のフォリオ番号を載せた挿絵対応表と併せて用いれば、今後の余白詩篇研究の基礎となる有益な資料となるだろう。</p> <p>加えて、ケース・スタディとして、新約聖書の物語と前後のエピソードを語る挿絵が描かれた箇所や、使徒言行録のサイクル挿絵が作られている箇所を分析し、その特徴を指摘した。数葉に互って連続する挿絵は、9世紀の時点で既に成立し、一定の効果を上げていた。しかし11世紀にテオドロスが行った改変は、手本を踏まえてさらに重層的な構造を生み出すことで、新約聖書のエピソードとイザヤ書など、鑑賞者の持つ知識に訴える新たな企図を成功させている。</p> <p>余白詩篇においては、旧約の詩篇というテキストに付された挿絵が、福音書、新旧約の他の文書などと結びつけられて理解されていた。第1部を通じて請求者が示し、明らかにしたのは、既存の研究で指摘されてきたような、「1テキスト：1挿絵」に対して行われる解釈に留まらず、連続する複数の挿絵をサイクルとして捉え、詩篇本文と並行して他のテキストの内容を響かせる、という高度に知的な操作がなされた箇所であった。新旧約聖書を熟知し、恐らくは詩篇や福音書を暗誦し、典礼文や神学に関する知識も深かった、教養ある修道士たちがこの写本の制作者であり、鑑賞者だったのである。</p>	

第2部は、『テオドロス詩篇』が制作された、ストゥディオス修道院の写本工房を巡る問題を論じる。同修道院は帝都における文化的な中心として機能し、写字生と画家を擁する写本工房を有していた。文書史料が一切残っていないため、残された写本作例からその制作の実態を考える以外の方法はないが、四福音書や詩篇など、ジャンルの異なる複数の著名な写本がこの時期の修道院に帰属されている。

同修道院工房を論じる上で、第1部において主に扱った『テオドロス詩篇』の写字生にして画家、テオドロスの存在が重要になる。彼が筆写したとされるのは、『テオドロス詩篇』と、それに極めて近い構成を持つ余白詩篇『バルベリーニ詩篇』、四福音書『パリ福音書』、そして1922年に焼失し、今はモノクロームの図版のみが残る動物寓意譚、スミルナ（現イズミール）のフィシオロゴスである。一人の写字生の手で書かれた、これらジャンルの異なる4冊を分析するには、一冊の写本の中で完結する、またはひとつの主題のみを比較検討するような、従来の研究方法は十分と言えない。

以上を踏まえて第2部では、『テオドロス詩篇』を中心に、同修道院工房の制作とされる複数の写本を、本文のジャンルを問わず比較検討し、これまで議論されてこなかったビザンティンにおける写本工房の実態を明らかにすることを目指した。

全体として請求者が試みたのは、11世紀後半の限られた期間にストゥディオス修道院においてどのような知的営為が行われていたのか、という点である。高度な神学・図像知識を有し、多様なテキストを暗誦していた修道士はどのように写本を制作し、理解していたのか。物証が乏しく現存作例も少ないビザンティン写本制作の実態を探るには、一見僅かな差異や一致に過ぎないかのような箇所を、入念に検討し、少しずつ明らかにしていくほかないとこの請求者の主張は、審査員全員に理解された。

特殊な図像の分析に終始しており、これをもって『テオドロス詩篇』の本質と考えることができるのか、との意見も出されたが、400以上の挿絵すべてを論じることは学位請求論文の範囲を超える、という点は了承された。英語で学界に問うべき重要な成果を多く含むことが、審査員全員に認められた。とくに詩篇本文と並行して、新約聖書の複数の挿絵を付する「ポリフォニック」という方法論の提唱は高く評価され、本学博士学位請求論文に相応しい内容を有すると判断された。

公開審査会開催日	2012年5月26日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	Ph.D(ギリシア国立テサロニキ大学)	益田 朋幸
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		大高 保二郎
審査委員	愛知教育大学・教授		浅野 和生